

言葉の力を自覚し、共に更新し続ける国語科学習の創造 ～本物の対話を通して学び合う国語科教室を目指して

研究部長 中里 宏

1 これからの社会に求められる力

今日の子供たちが成人して社会で活躍する頃には、AI、ビッグデータ、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来し、社会の在り方そのものが現在とは「非連続」と言えるほど劇的に変わるとされている。

このような時代にある中で、2040年以降の社会を見据えた学校教育には、多様な人々と協働しながら「持続可能な社会の創り手」となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

この資質・能力について考えてみたい。中央教育審議会（以下中教審）は、平成28年答申において、次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力として、「文章の意味を正確に理解する読解力」、「教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力」、「対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力」などを挙げている。また、『「令和の日本型教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（令和3年答申）』の中では、従来の日本型教育では「目の前の事象から解決すべき課題を見いだし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど、正に新学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められている」としている。そのことを踏まえ、国語科においても、言葉についての学びを進める中で、子供自身が学習の状況を把握し、主体的・自律的に学習を調整していく機会や、他者と協働して学び合う場を一層充実させていくことを通して、予測困難な時代を生き抜くために必要な「言葉の力」を子供に培っていくことが重要となる。その鍵となるのが、「言葉による見方・考え方」を働かせることである。

2 求められる国語科の力

国語科における、教科固有の見方・考え方とは、「言葉による見方・考え方」である。この教科固有の見方・考え方を働かせることが、教科の本質に迫る学びを生み出す。この「言葉による見方・考え方」を働かせるためには、まずは「言葉に着目して、自分なりの考えをもつこと」が必要である。また、この「言葉による見方・考え方」はその子の既有知識・生活経験に大きく左右され、同じ言葉でも、どのように捉えるか、どう使うかについては、納得解や最適解はあっても絶対解はないことが多い。その納得解や最適解は、他者との対話によって、実感を伴って獲得され、広がり深まっていく。そのような対話を通して、「言葉による見方・考え方」を働かせながら自らを更新していく学びが求められている。そのような学習の過程があるからこそ、自分の考えを問い直し、言葉についての学びを積み重ね、自らの「言葉への自覚を高める」ことができる。これは国語科の改訂の趣旨及び要点の中の『学習過程の明確化、「考えの形成」の重視』にもつながる。

今後目指すのは、子供が「言葉の力を自覚し、共に更新し続ける」授業である。このような授業を

通して、小学校段階における国語科の学びを着実に蓄積し、他教科、日常生活、将来に波及するような汎用性のある資質・能力を育成していく。

3 研究の実際

(1)「言葉の力を自覚し、共に更新し続ける」授業とは

ここで、言葉の力とは様々な捉え方があるが、本研究においては、言葉の力を教師の側から捉えた場合、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」を子供に育む国語科における指導事項であると定義し、子供の側から捉えた場合、子供が国語科学習で獲得する「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」であると位置づけたい。

私たちは日々言葉を使い、過ごしているがゆえに、その言葉の力を改めて意識する場面は少ない。その「言葉の力」に立ち止まり、その言葉の力に対する見方や考えを広げたり、深めたりし、新たに捉え直すことこそ国語科の授業の醍醐味であろう。そういった授業の中での学びを自分の言葉の力として自覚していくことで、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」各領域の新たな学習場面や、日々の生活、そして未来の社会生活に生かすことができるようになっていくであろう。【図1】

そして、そういった言葉の力を育む学びを豊かにするのが共に学ぶ教室の友達である。生活経験や考え方の違う友達との対話を通して、自分の中の問いや納得解、最適解を粘り強く模索することで、新たな言葉の力の価値に気付いたり、再構成されたりしていく。そのような問いと最適解と納得解の往還を繰り返すことで、言葉の力が更新されていくであろう【図2】



図1 言葉の力を自覚する

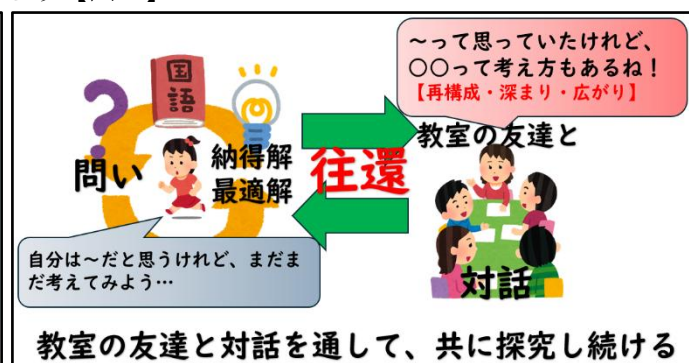


図2 共に更新し続ける

(2)「本物の対話を通して学び合う国語科教室」とは

以上のような、言葉の力、そして自覚と更新の往還に重きを置いた学びは近年本研究会でも提唱し、様々な実践を積み重ねてきた。その積み重ねの上で、本年度は、指導要領の目指す主体的・対話的で深い学びの「主体的・対話的」という側面から授業を見つめ直していくという思いを込めて、副題を「本物の対話を通して学び合う国語科教室を目指して」とした。ただし、これまで積み重ねてきた実践の対話場면을本物ではないと否定するものではなく、子供の学習活動や対話に対する主体性に今一度目を向けたいという趣旨であることを前提とする。

では、「本物の対話を通して学び合う国語科教室」とはどのような教室なのか以下に定義付けたい。まずは言葉の力が育まれる国語科学習を進めていく中で、意欲をもって取り組むことのできる学習場面があることを基盤とする。その上で、子供が自分の考えをより良いものにしたい、新しいことを知りたいと心から願い、そのために教室で共に学ぶ友達の考えを心から聞きたい、自分の考えを聞いてほし

いと話し合う教室を、「本物の対話を通して学び合う国語科教室」と位置付ける。

(3) 研究の視点について

「本物の対話を通して学び合う国語科教室」を目指すために、以下に示す3つの視点を大切にしたい授業づくりを行う。

視点1：【学びの指針となる学習課題】

学ぶ意欲を生み、言葉の力が育まれる言語活動の工夫

子供が教材・題材と向き合う中で、興味関心をもち、単元を通じてどのような学びに取り組むのか、その指針となる「学習課題」を設定する。その際、「言葉の力」と「言語活動」の二つの視点を大切にしたい上で、子供の意欲や問いを大切にしたい学習課題という大きな言語活動の枠組みをつくっていく。この単元を通じた学びへの意欲が視点2である対話の場面にも大きく関係してくる。また、言語活動に意欲的に取り組む中で、子供が「この言語活動の達成を通じて、こんな言葉の力が身に付いた。」と自然に自覚できる場面が生まれるように工夫することも重要となる。また、この学習課題の探究が進めば進むほど、教室に沢山の価値ある考えが生まれたり、学習課題達成のための解決方法や表現方法においても選択肢が多様化したりすることも想定される。発達段階に応じて、そういった学びの個性化も視野に入れた学習過程や言語活動の捉え方も必要である。

<視点1 学びの指針となる学習課題> 学ぶ意欲を生み、言葉の力が育まれる言語活動の工夫

視点2：充実した対話の場

学習課題を土台として生まれる本物の対話の表出場面。その対話の場をどのような手立てを講じることによって充実させていくか2つの視点を設ける。

① 個が生きる協働の場の工夫

単元を通じて個々の問いの探究が保障され、個々やグループでの学習活動の時や場が保障されることは重要であり、個別最適な学びの充実に資していると言えよう。一方、個の問いや関心事に意識が向くあまり、教室で共に学ぶ友達の問いや関心事に意識が向きにくい場面が生じてしまうことも懸念される。

そこで、教室で学ぶ友達と協働的に取り組み学んだことを、個の学びにも生かすという視点に重きを置き協働の場を捉えてく。例えば、〇〇リーフレットを作るという言語活動において、伝えたい相手や思い、こだわる資料等は個々で探究する場は保障する。その上で、そのリーフレットの書きぶりや構成についての悩みを共有できるようにしておき、その悩みの中から「構成」について全員で立ち止まる協働の場を設ける。そういった一連の学習過程で得た学びを個々で生かしながらリーフレット作成に生かすという単元構成など考えられる。これは、あくまで「書くこと」の領域の一例であり、領域によって、また題材や教材によって工夫の仕方も多様であろう。さらに、単元構成の工夫や問いや悩みの共有方法などにおいても様々な工夫の余地があるはずである。

そこで留意したいことは、友達と共に考えることが、自分の問いや悩みの解決につながるということを教師が価値づけをする場面があったり、子供自身が友達の考えが自分の考えの更新に良い影響を及ぼしていることを自覚する場面があったりすることである。【図3】

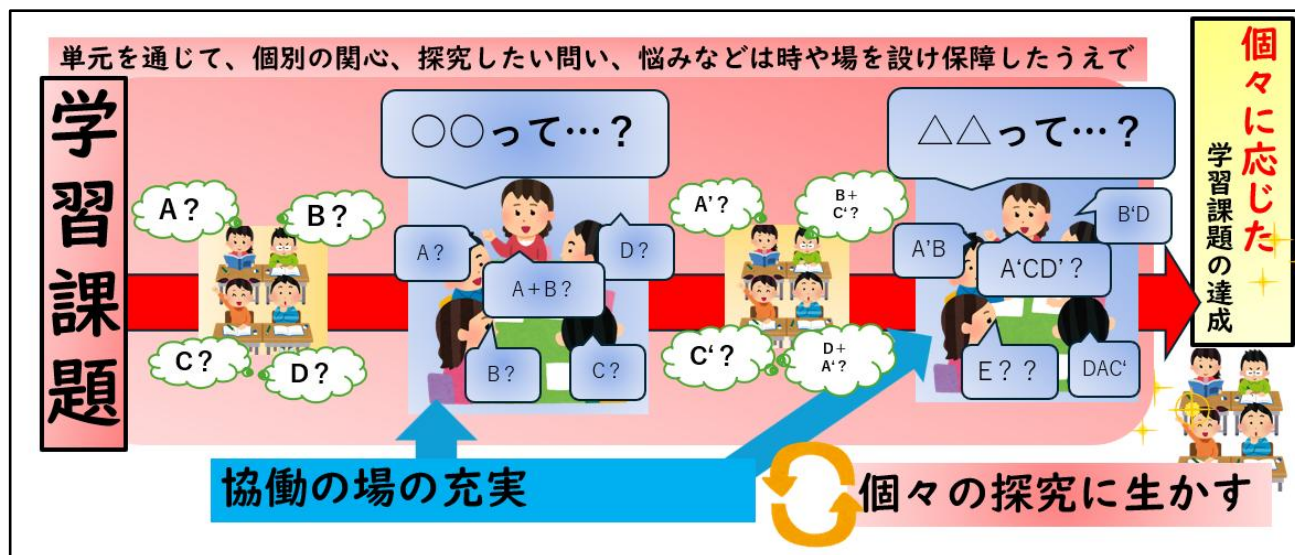


図3 個が生きる協働の場の工夫

② 考えを吟味し合う工夫

これまで積み重ねてきた授業実践の中で、対話場面が個々の考えの伝達に終始してしまうという課題もあった。そこで、考えの伝達から一歩踏み込み、個々の考えの根拠、理由や思い等の考えの内容をより詳しく明らかにしようと吟味し合うような対話を目指していきたい。

【図4】そのために、まず他者の「考えを聞きたい」という思いやきっかけを生む必要があるだろう。具体的な手立てとしては、色、

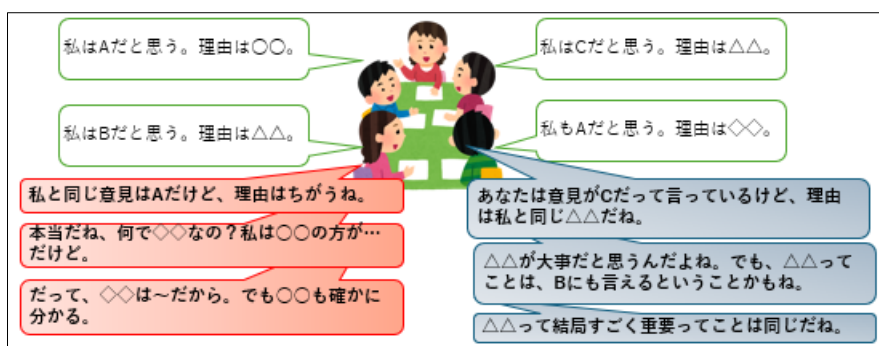


図4 考えを吟味し合う

シンキングツールの活用で視覚化の工夫をし、対話のきっかけを生むことが考えられる。また、子供の問いや実感の伴った悩み事を全体に取り上げ、検討する場を設けて共有する、また、子供の考えのずれを表出させる教師の発問や問い返しも有効であろう。その際に、「友達の考えを聞きたいな」と思える学習展開や場面での対話活動の設定がなされることや、各領域・単元・教材で重要となる言葉に立ち返るような学習活動の工夫や教師のコーディネートも重要であろう。【図5】



図5 「考えを聞きたい」を生む工夫

また、考えを吟味し合うためには、考えの伝達ではなく、対話の相手が何を考え、その理由や根拠、思いは何なのか詳しく明らかにしようとする姿勢やその方法が大切であろう。そのために、質問や聞き方に着目し教師が価値付けていく。こういった質問や聞き方が相手の考えを明らかにすることにつながったか立ち止まったり、焦点化したり、価値付けたりしていくことで、対話自体を楽しむ姿や、相手の考えから自分の考えを更新していこうとする姿が生まれてくるであろう。その際、留意したいことは、質問や対話の話型を教室で教え込むことではなく、あくまでどのような質問の言葉や聞

き方が、相手の考えを明らかにすることができたか教室で共有し、教師が価値付けていくことが重要である。【図6】



図6 質問・聞き方への着目を促す

<視点2 充実した対話の場>

- ① 個が生きる協働の場の工夫 ② 考えを吟味し合う工夫

【視点3：言葉の力の自覚を促す振り返り】

言葉の力を対話を通して更新していく中で、言葉の力に対する新たな気づきや深まりに対する自覚を促すために、振り返りの視点やその振り返る時や場や共有の方法などを工夫していく。その際、言葉の力の自覚だけではなく、新たな気づきに迫る友達の発言、試行錯誤の方法や過程等、言葉の力の更新にまつわる学び



図7 言葉の力の自覚を促す振り返り

の過程を含めて自覚を促すことで、言葉の力の更新だけでなく、さらなる学びの価値を見出していくことを目指していく。【図7】

① 視点の焦点化の工夫

振り返る視点を焦点化することで、単元を通して自分が実感を伴って捉えなおした言葉の力、学びの価値を自覚できるようにする。例えば、言語活動に取り組む過程において学習課題の達成を見据えて振り返ったり、友達と対話し協働して学んだ過程そのものを振り返えったり、課題へのアプローチの方法や、更に考えてみたいことや次の問いにつながることにについて振り返ったり、単元始めの自分の考えと単元終末の自分の考えを比較して振り返ったり等様々な焦点化の工夫が考えられる。このように視点の焦点化を工夫することで、より明確に言葉の力の更新や自己の変容の自覚を促す。

② 振り返る時、場、共有の工夫

振り返る時や場とは授業の終末に限ったものではなく、授業の冒頭や展開など柔軟に設定することも学びを自覚する上で有効であろう。そして、単元の終わりに、学びの始まりと学び終えた自分の比較する場を設けることで単元全体の学びを俯瞰することができるなど、こういった時に共有することが有効か単元構成や学習過程という視点で振り返る時を工夫したりすることも重要である。また、単元を通じて柔軟に振り返りを共有する場面を設定することによって、本時の価値や学習内容、言葉の力について、他者の振り返りから学ぶことができる。振り返りの共有を積み重ねることで、子供は他者の振り返りを通して自らの学び見つめ直し、学びを調整し価値付けていく。

<視点3 言葉の力の自覚を促す振り返り>

- ① 視点の焦点化の工夫 ② 振り返る時・場・共有の工夫